

粘土遊びにおける表現と身体性についての一考察

— 粘土を身体につける事例の検討から —

南 陽 慶 子

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

粘土遊びにおける表現と身体性についての一考察

—粘土を身体につける事例の検討から—

南 陽 慶 子*

A Study on Expression and Body in Playing with Clay

: Focusing on the episodes of pasting clay to body

NANYO Yoshiko

abstract

This study clarifies the reality of interactions between children's body and material in playing with clay in order to reconsider children's experience on molding activities expression. Three episodes of children's activities of pasting clay to their body are picked up from participant observation in nursery school. The analysis from the phenomenological viewpoint shows three aspects. First, by pasting clay to some part of his body, the child feels his body boundary clearly and that part special. Second, the child experiences the wave and change of his body boundary. He does not treat the clay as an object itself but responds to it. In this way, he opens his body to the world. Third, the child experiences the fusion when the change of his body boundary becomes deeper. The previous researches mainly examined children's molding activities as productive activities, however this study focuses on each child's inner experience and considers the child as a subject of expression. Each episode suggests that children's expression in playing with clay can not be explained only as a productive activity or an ability for producing, and also finds out that this kind of experience helps children's self-formation.

Key words: expression, body, play with clay, molding activities, experience

I. 問題と目的

日本の幼稚園草創期から現在に至るまで、粘土は保育の現場に古く長く取り入れられてきている¹⁾。この事実は、保育において、粘土遊びが子どもにとって重要な体験であると価値づけられてきたことを表していると言える。粘土が極めて可塑性に富む素材であり、小さな子どもでも容易に変形させることができるという特性にその一端があろう。しかし、かつて粘土が手先を器用にし手本を模倣するための道具として扱われてきたという歴史的な背景を一因として²⁾、与えられた課題に沿って何かをつくるのが長らく一般的であった³⁾。これまで保育における表現は「出来上がりとしての表現活動」に向かってきたと指摘されるように⁴⁾、近年の粘土遊びでも、作品展などのために最初から作品づくりを目的とするか、表現という動きのはじまりとしては捉えず、粘土が小道具と化し、「造形表現としての教材的感覚としては位置づけされていない」⁵⁾という実態が多くみられる。つ

キーワード：表現、身体性、粘土遊び、造形、体験

*平成24年度生 人間発達科学専攻

まり、粘土遊びにおける子どもの表現を捉え、それが子どもにとっていかなる体験であるのかを了解し、粘土遊びの意義について十分な検討がなされてきたとは言い難い現状にある。

さらに、子どもの粘土遊びに関する研究も乏しい⁶⁾。中川は、国内外の「粘土造形」^{注1)}の発達段階に関する研究をレビューし、それらの研究成果が描画を補足するものであるか、あるいは描画との比較資料としての断片的な実験報告を超えるものではなかったと指摘する⁷⁾。その上で、粘土の特性に配慮した実験分析の結果、「粘土造形」では描画に発現する前の原始的な操作が現れる可能性が高いと述べ、粘土の造形操作と作品形態の発達過程を明らかにしている⁸⁾。しかし、これらの先行研究では、数量的な測定や一定の定義で回収可能な事象のみ焦点を当てている。また、美術教育的な観点から粘土遊びにおける表現の充実を目指す研究では、発達段階に沿って、望ましい造形表現能力^{注2)}を獲得するために有効な指導方法が検討されている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。こうした研究では、粘土遊びにおける表現は発達段階に応じて有すべき造形制作能力と結びつけて論じられており、よい表現能力の獲得と向上のために成長する子どもが目指され、子どもの表現に向けられたまなざしは評価的な意味合いが強いと考えられる。つまり、粘土で何かをつくること、つくることへ向かうことが自明のこととされており、「『作る』という近代教育的価値」¹²⁾のもと、有用な生産活動としてのみ表現を捉える傾向にあると言える。

以上のように、先行研究では、粘土遊びにおける操作能力や作品形態から子どもの発達段階を捉えようとし、また、あらかじめ志向される表現の枠組みのもとに子どもの表現が取捨選択されてきたことがわかる。その結果、ただ粘土に指で穴をあけたり、足で踏んだり、粘土をちぎって並べているだけのような子どもの姿は、発達過程に着目する研究では「粘土造形」以前の無意味で無秩序な行為と見なされ、「粘土造形」の指導法を検討する研究では望ましい表現への成長を促されるべきものとして制作技術の獲得が必要とされるように、その先のより高度な造形表現に向かうための前段階として捉えられてきた。つまり、子どもがどのように粘土と関わっているのかという、その子どもの内的様相や体験のありよう、表現には焦点が当てられておらず、子どもの表現を外側から捉える傾向にある。言い換えるならば、共感的な理解によって子どもの表現を捉えようとする立場には立ってこなかったと言える。しかしながら、保育が、子どもと共に生きる中で、子どもの行為に子どもの世界の表現を見、その世界が育つのを見守る営みであるならば、人間が人間を理解することを抜きにしては成り立たないはずであり¹³⁾、共感的な理解が必要不可欠となる。それは、粘土遊びにおける子どもの表現の内実に迫ろうとする場合にも同様であろう。岡本が、「表現が主体に対してもつ意味は、結果的産物の中よりも、その過程の中においてこそ、まず論じられねば」¹⁴⁾ならないと指摘するように、本論文でもその過程を描き出す必要がある。

その際、現前する子どもと粘土との関わり、また、そこで生成される表現の過程を捉えようとするにあたって欠くことのできない視点として浮かび上がってくるのが、その子どもの身体のありよう、そしてそれを見る筆者自身の身体のありようではないだろうか。なぜなら、粘土遊びを含む造形的な表現活動とは、素材と自らの身体の間合いの中で成り立っていく行為であると言えるからだ。臨床的な観点から人と人との関係を探る鷺田が、「身体は、いのちの座であると共に、知覚や感覚の座であり、その意味で世界と関係をになう、あるいは世界との関係が起こるもっとも基礎的な媒体」¹⁵⁾と述べるように、造形表現においても、関わり基盤となる身体のありように着目する必要があると考える。とりわけ、自ら言語で説明したり、明瞭な結果的産物に至るばかりではない子どもの造形的な表現を捉えようとする場合、その身体性を理解することが肝要となろう。しかし、先に述べたように、素材をいかに扱うかや表現の仕方についての研究はあるが、造形表現における身体性を主題的に扱う研究は極めて少ない。筆者の調べた限りでは、粘土遊びの実践研究により身体的な遊びの重要性について提起する研究があるものの¹⁶⁾、具体的な子どもの姿からその身体性を明らかにするには至っていない。そこで本論では、表現のその過程を捉えるべく、粘土遊びにおける子どもの身体のありように着目したいと考える。

以上のことから、本論文では、粘土で遊ぶ子どもがいかなる体験にあるのか、またその意義を捉え直すために、具体的な子どもの姿から粘土遊びにおける身体性に着目し、描出する。それによって、粘土と関わる身体のありようを明らかにすること、さらには粘土遊びが子どもにとってどのような体験であるのか、その内実に迫ることを目的とする。本論では、最終的な作品に至らない行為、生産性や有用性といった指標では測ることのできない子どもの表現のありようを積極的に捉えていくと共に、そのような造形表現のもつ意味を考察することで、子どもの表現をより全体的に捉えることの助としたい。

Ⅱ. 方法

1. 対象および観察手続き

静岡県内の私立保育所N保育園において粘土遊びの実践および参与観察を行い、そこで得られた記録を考察の手がかりとする。本論文では、2008年5月から2010年1月までの期間（おおよそ月1、2回の頻度）で、計21回の実践および参与観察を行い、子どもたちが活動場所にやって来てから片づけを終えて部屋を出るまでの約2時間、粘土遊びに参加した不特定多数の2～5歳児（毎回25名程度）を観察の対象とした。N保育園は異年齢保育を行っており、2～5歳児の行動範囲には基本的に制限がなく、それぞれ好きな場所で自由に遊ぶ。本実践もそれに倣い、遊びたい子どもが自由に参加できるようにした。

実践および観察中は筆者が携帯するデジタルカメラによる撮影を行い、子どもたちの退室後に備忘録として短いメモをとり、帰宅後、撮影された写真とメモをもとに記録を起こすかたちでフィールドノーツを作成した。なお、フィールドノーツには、筆者の印象に残った子どもの姿や出来事はもちろんのこと、その日の子どもたちの粘土との関わりや表現行為を思い出せる範囲で全て記録するように努めた。

2. 粘土遊びの実践内容

環境設定としては、会場となる部屋はできる限り凹凸をなくして床一面にシートを敷き、その上に200～300kgの粘土を置いておく。活動の流れは、子どもたちが部屋に入って来た後は、自由に粘土に触れて遊ぶ。お昼の時間が近づく頃合いを見て声をかけ、片づけの一環として使った粘土を1ヶ所に集め、シートを雑巾がけして活動終了である。本実践は、環境設定も活動の流れも、当日の子どもたちの様子や状況に応じて柔軟に変動するものであり、即興的であるという特徴をもっている。また、筆者を含め保育者は技術的な指導などは行わず、子どもの自由な遊びに寄り添い、応答していくことを心掛けた。なお、本実践で用いられ、本論で「粘土」と表記されているものは、すべて「土粘土」^{注3)}を表す。

3. 観察および考察の視点

本論文がとる参与観察とは、「対象者と生活と行動をともし、五感を通したみずからの体験を分析や記述の基礎におく調査法」¹⁷⁾である。既述したように、粘土遊びにおける子どもの表現を共感的に捉えようとする場合、従来の発達過程のスケールに子どもの表現を当てはめたり、あらかじめ志向される枠組みに回収するかたちで子どもの表現を捉えようとするありかたは適さないと考える。研究のために表現のもつ多義性を削ぎ落して単純化するのではなく、「生きた現実の出来事」¹⁸⁾に密着して把握するという構えが必要となろう。

鯨岡は、フィールドにおいて人と人の「あいだ」に生じているものを、関わり手や観察者がその「主観」において捉えることを「間主観的に把握されるもの」として積極的に認めていくことにより、「その人の固有の生のありようを手応えをもって」捉えようとする¹⁹⁾。本論においても、鯨岡に倣い、「事象を可能な限りあるがままに捉え、手ごたえのある形で理解する態度、つまり、出来事に密着し、その出来事の息吹を研究者自身がありありと感じ、その中で出来事の意味に導かれる」²⁰⁾という現象学的態度を通底してとっていく。他者を理解するということは、メルロ＝ポンティによれば、「私の意図と他者の所作とのあいだの相互性、私の所作と他者の行為のなかに読みとり得る意図とのあいだの相互性によって」了解されるということであり²¹⁾、こうした交叉点における結び目を記述的にほぐしていくことによって、子どもの表現の内実も明らかになるのだと考えられる。

さらにメルロ＝ポンティは、「身体とは、世界のなかへのわれわれの投錨のこと」²²⁾であるとして、「世界－内－存在」の媒質としての身体のありように着目する。つまり、世界を対象として認識する以前に身体を介して世界と関わり合っているという人間の実存を、身体の働きに見て取り、そこに人間の生をめぐる思索の基礎を置いたのである。このような論に依拠するならば、子どもの表現を捉え理解しようとする際にも、具体的な場面における子どもの生き生きとした身体の働きや感覚を捉え、考察する必要があることがわかる。

以上のことから、本論文では、観察者である筆者に「間主観的に把握」されたものを分析の対象とし、事例における子どもの身体性について、メルロ＝ポンティなどの論を手がかりに現象学的視点から考察する。

4. 分析の方法

本論では、具体的な子どもの姿から粘土遊びにおける身体性に着目するため、参与観察で得られた事例のうち、粘土遊び特有の身体性があらわれていると考えられる事例を抽出して分析する。そこで、参与観察で得られた全事例を対象にしたKJ法による分析の結果、拙稿²³⁾で見出された6つの表現形態^{注4)}のうちの1つである“粘土を身体につける”事象より、その中でも粘土遊びにおける身体性が顕著にあらわれていると考えられる3事例を取り上げ、本論文の事例とした。また、事例中の表記にある「私」とは、筆者自身を表す。

なお、本論文は、当該園に研究内容とデータの取り扱いについて説明し、事例の採用と考察の公開の了解を得るなど、研究倫理的な配慮を行った^{注5)}。

Ⅲ. 結果と考察

1. 際立つ身体

1) 事例1：指先に小さな粘土をつける

M(2歳児)は粘土の塊を前にしてしゃがみ、塊から粘土を右手で少し引っかき取ると、左手の親指の先にその小さな粘土片(大豆ほどの大きさ)をつける。それから再び右手で粘土を引っかき取ると、指先でキュッキュッと大豆ほどの大きさにまとめ、今度は左手人差し指の先にその粘土をつける。そして中指、薬指の先へと順に小さな粘土片をつけていく。その左手のひらは彼自身の方へ向けられており、Mの視線は手のひらに終始しっかりと注がれたまま全く動かない。その表情は真剣そのものに見える。そして、小指の先にも粘土をつけ終わると、開いた手のひらを口をきゅっと結んだままじーっと見つめている。私は、Mの全身の神経がきゅーっと指先に集まっているかのようなその様子に、何か惹かれるものがあり、少し離れた場所から彼を見続ける。

Mは顔を上げて私と目が合うと、手のひらを私の方へくると向け、指をパッと大きく開く。その時Mは何も言葉は発しなかったが、そのパッと開かれた指が、ほらっ！と言っているかのように思われ、私は、まあ！という思いで目を大きく開くようにして微笑み返す。

2) 事例1の考察

この事例では、Mが自分の指先に小さな粘土をつけていく様子から、5本すべての指先に粘土をつけ終えた自らの手のひらをじーっと見つめる様子、そして最後に筆者との極めてささやかなやりとりの様子が描かれている。ここでは、Mの手のひらの向きに注目したい。指先に大豆ほどの粘土がつけられたMの左手のひらは、M自身に向けられている。このことから、指先に粘土をつけていく一連の行為が、人に見せるためや見せることを想定してなされた行為ではなく、自分が見たり感じたりするためになされた行為であることがうかがえる。Mは、5本の指先すべてに粘土をつけ終わると、手のひらを自分に向けたまま、真剣なまなざしで見つめている。このとき彼の意識は、粘土がついたことで強調された自らの指先に集中していたのだと考えられよう。そして、目の前にある手のひらが、いつもとは違う手のひらとして際立っていたのだと考えられる。自分の指のその先はもう自分の身体ではなく、そこは外界であり、触れることのできない空間である。つまり、指先は自分の身体と外界との境界点だと言える。その境界点に粘土をつけることによって、自分の身体の終点が際立ち、身体と外界との境界があらわとなり、今ここに在る自分の身体を視覚的にも体感的にも鮮明に感じていたのではないだろうか。

これは、身体とは、「ときには〔現実的〕世界から身をそむけて、その活動を感官的表面に訴えてきた諸刺激に適合させ、実験的状况に身をまかせ、より一般的に言って、潜勢的なもののなかに身を置くこともできる」²⁴⁾という事実を示していると言える。つまり、身体は常に一定の濃度であるのではなく、状況に応じてその存在の濃淡は変容し、時にMのようにその存在が浮き彫りになるということがわかる。そして、目が合った筆者に手のひらをくると向け、指をパッと大きく開いて見せたMの行為は、ほらっ！指先に粘土をつけられたよ！というように自らの操作能力を誇示したかったのではなく、ほらっ！ぼくの指先はここにあるよ！というように、粘土を指先につけることで浮き彫りとなった身体によって新しく出会われた自分という存在の表現であったのではな

いかと考えられる。そして、手のひらに全神経を集中させているかのようなMの真剣な表情は、この体験が彼にとって意味深いものであることを訴えている。

2. 揺らぐ身体

1) 事例2：指が伸びる

床に腰を下ろしたH（5歳児）は、粘土を右手人差し指に巻きつけるように貼りつけている。再び左手で粘土をつかみ取ると、それもまた右手人差し指に貼りつけ、左手でギュッギュッと握るようにして押さえている。それを何度も繰り返し、Hの人差し指はすっかり粘土に包まれる。その後もHは、粘土で包まれた指の先にさらに粘土をくっつけては握るということを繰り返し、彼の人差し指はどんどんその長さを増していく。吸い込まれるように粘土の指先を見つめるHの姿に、私はそれまでの動きを止め、少し離れた場所から彼の様子を見ていようと思う。

Hの粘土の指が、実際の指の長さの3倍ほどになると、重さに耐えかねてか、粘土の指はグーンと弧を描いて曲がるようにして下を向く。Hは左手の動きを止めると、右手を目の高さくらいまで高く上げ、垂れ下がった粘土の指先を笑みを浮かべながら見つめる。

しばらくすると、粘土は指の先のところでプツリとちぎれて床に落ちる。Hはケラケラとした屈託のない笑い声をあげ、粘土から少しだけ頭を出した人差し指の先を私の方へ向けて見せる。私は、粘土に囲まれた中でちょこんと豆のように見える彼の指先に可笑しくなり、思わず一緒に笑う。

2) 事例2の考察

この事例では、自らの指に次々と粘土を貼りつけ、段々と伸びていく指を見つめる子どもの姿が描かれている。吸い込まれるようにその指先を見つめるHの様子に、筆者自身も思わず見入っている。前述した事例1と同様、このとき粘土に包まれてその長さを増した指は、いつもとは違う自分の指としてその存在が際立っていたと考えられる。そして、この事例におけるHの身体と外界の境界点は指先にとどまっていない。外側からは、粘土が身体の一部となって彼の指は伸ばされ、外界との境が外に向かって延長されているように見えるのだが、粘土の内側では、実際の指と粘土の境が曖昧になっていったと考えられる。つまり、彼は伸びていく指を感じると共に、粘土に包まれる中で、どこまでが自分の本当の指でどこからが粘土か明確にはわからないという揺らぐ感覚の中にいたのではないだろうか。メルロ＝ポンティは、自分の腕の空間を異物のように感得する疾病失認症患者が、腕の客観的な輪郭や所在を認めているにもかかわらず、自分の腕のことをまるで長くて冷たい蛇のようだと語るといって例を挙げ、われわれの身体には客観的な空間性のほかに、「感情的な現存および延長」というものがあると指摘する²⁵⁾。Hは、客観的な身体だけでなく感情的な身体に自己の存在をあらわしていたのであり、それは、粘土を身体の一部とすることによって、自己と外界の境界が揺らぎ不明確となる中で伸長する身体であったと言える。そして、Hはそういういつもとは違う自分の指に惹きつけられていたのであり、身体のそうした曖昧な状態を視覚的にも体感的にも楽しんでいたことがわかる。

さらにここで注目したいのは、この長く伸びた粘土の指が、あらかじめ成形されて指につけられたのではなく、繰り返し粘土を貼りつけることで最終的に長い指になったということである。このことから、この一連の行為が最終的な形のイメージがあってなされたものではなく、彼自身の身体感覚を基軸としながら粘土との関わりの中で展開されていった行為であるということがうかがえる。そして、粘土がちぎれて少しだけ頭を出した指先を筆者に見せたHの行為は、自分の身体の再発見を他者に伝えようとする気持ちのあらわれであったのではないだろうか。それまで曖昧であった自分の指先の在りかが、今こうしてあらわとなり、改めて自分の指に出会っていたのだと考えられよう。

3. 溶ける身体

1) 事例3：粘土に埋まる

J（5歳児）は粘土の塊をいくつか集めて踏みしだき、大きくて平らな島状になった粘土の上に体育座りのように座ると、島から粘土をかき集め取って左足の甲にかぶせ、その上から両手でギュッギュと押し固め始める。粘土が足にしっかり貼りつくのと、また島から粘土をかき集め、さらに足の上へ上へと貼りつけていく。真剣な面持ちで一心不乱に黙々とそれを繰り返す様子に、私は、何が始まったのだろうと気になる。

Jの左足が膝下近くまで粘土で覆われた頃、Tがやって来てJと向き合うようにして座り、同じように黙々と粘土を足に貼りつけ始める。Jの視線は、時折向かいのTの足元に向けられる以外、終始自分の手元と足元の粘土に注がれている。Jは左足の膝上まで粘土で覆うと、足に貼りついている粘土の隙間や凹んでいる部分の上にもさらに粘土を重ね、両手のひらで包むようにして押さえつける。それまでゴツゴツとしていた粘土の表面は、次第に平らになって堅固さを増していき、しばらくするとJの左足はまるで分厚くて頑丈なギプスで覆われたかのようになる。すると、今度は右足の甲に粘土を貼りつけ始め、左足と同様、右足も膝近くまで隙間なくガッチリと粘土で覆う。

（中略：この間にTが場所を移動してJの動きに加わる）

その後、Jは再び周囲にある粘土を両足の上や周りにどんどん重ねることを繰り返し、ついにJの下半身は粘土の山に埋まったようになる。その様子は、大きな粘土の山から身体が生えているかのように見える程だ。それからJは、上半身を緩めて力の抜けたような表情でそのまま動かなくなると、自分の足の上に積まれた粘土を少しの間見つめた後、再び上半身を起こして自分が埋まる粘土の山の頂上部分を撫でたり叩いたりしている。

しばらくして、保育者の片付けを促す声がすると間もなく、Jから「やあー！わあー！」と歓声上がる。すぐさま彼の方を見ると、すでに立ち上がったJが歓声と共に、崩れた粘土の上をためらいなくジャンプしている。私は、それまで積み上げてきた粘土の山から一瞬で身体を抜き去り、今度はその粘土を壊すというJの身のこなしの早さにあっけにとられると同時に、崩れてごろごろと散乱する粘土の中で飛び跳ねる彼の姿が、まるで粘土の山からたった今生まれ出てきた人のようだと感じる。そしてJは、バラバラになった粘土の塊を抱え、片付けを始める。

2) 事例3の考察

この事例でJは、粘土の上に座ってから最後に立ち上がるまでの間、1時間半近くも粘土の上で、そして粘土の中で過ごしていた。粘土を身体につけるといふことの繰り返しによって粘土の量が徐々に増えていき、下半身の多くがすっかり厚い粘土で覆われたJの姿は、粘土を身体の一部にするということを超え、身体が粘土の一部になっているかのようなようである。その一心不乱な様子に加え、途中、上半身を緩めて一息つくような表情からも、粘土を身体につけるといふ行為に緊張感を持って強く集中していたことがうかがえる。前述の事例2において、身体と外界との境界が揺らぎ延長される事象を捉えたが、この事例が示すJは、まさに粘土と一体になっているかのようなようであり、その身体は粘土に溶けているかのような様相を呈している。このときJの身体は、粘土との境界が不安定で未分化な状態にあったのではないかと考えられる。どこまでが自分の身体かを見失うという、いわば“わたし”という意識から一時離れ、身体によって世界を感受し関わる体験をしていたのだと言えよう。そして、最後にそれまで一体化していた粘土との関係を打ち破り、一瞬にして粘土と自らの身体を分かちJの姿からは、再び安定的な世界へと戻る身体のありようが見てとれる。こうしたJの一連の行為は、「われわれの身体の諸部分間の連結や、われわれの視覚的経験と触覚的経験との連結は、〔経験論者の言うように〕少しずつ積み重ねられて実現されてゆくというものではない」²⁶⁾ というように、例えば粘土の山に身体を埋めようなどというある目的に向けて順序立って包摂的になされたものではないと考えられる。つまり、そこでの諸感覚や諸経験を一つずつ積み上げるといったものではなく、むしろそれらは、Jにおいて一挙に行われていたのであり、その瞬間瞬間における粘土の変化と身体感覚の統合的な出会いにおいてなされていたのだと言える。ここに、自己と世界の境界を軽々と行き来し、時に世界と一体化するという身体性を見ることができよう。

さて、Jは粘土で覆われることによって1時間半近くも下半身の身動きが自由にとれない状態になっており、

大量の粘土の重さを身体に受けながら同じ体勢でいることの大変さは想像に難くない。しかし、それでもJは安定的な世界を一時離れ、その身体を粘土と一体化するという不安定な世界に置いたのであり、そうせずにはいられない根源的な欲求が彼にはあったのだということを本事例は示している。矢野は、日常以上にアクチュアルな世界への全身的な没入を、自己と世界との境界線が溶解してしまう「溶解体験」であるとし、「生きていることの充溢感を味わうことのできる体験」²⁷⁾であると述べる。粘土と自分の身体が互いに別のものであることを忘れていたかのようなJの没入ぶりは、“わたし”という意識を超えた「溶解体験」にあったのではないかと考えられる。

IV. 全体的考察

1. 粘土に感応する身体のありよう

3つの事例を検討した結果、“粘土を身体につける”ことにより、身体の一部が際立ち、自分の身体と外界との境界が鮮明になっていることがわかった。さらに、身体の一部が際立つことで、身体境界が揺らぎ、変容する体験をしていることがわかった。身の概念を提唱した哲学者の市川が、「他の構造への『同調』ないし『感応』が、他者あるいは物の内面的理解を可能にし、世界をその表面にそってではなく、その深さにそって理解させる」²⁸⁾と述べているように、子どもの身体への粘土への感応が、身体の変容を生じさせ、身体によって世界を受容するという体験の深まりをもたらしていたのだと考えられる。さらに、身体の変容が深まることで生じていた粘土と自分が互いに別のものであることを忘れていたかのような子どもの様態は、粘土との融合状態であったと言えるだろう。つまり、子どもはある距離を必要とする対象として粘土と関わっていたのではなく、粘土を身体につける行為によって身体境界が開かれ、主体が溶解する体験をしていたのだと考えられる。

そして、3つの事例における身体の際立ちや揺らぎの程度はそれぞれ異なっているものの、いずれの子どもも、粘土を身体につけることによって一時不安定な状況にその身を置いていたと考えられる。ここに、それまでの安定を離れ、不安定で曖昧な感覚に身を置くことを厭わない開かれた身体のありようを見ることができよう。本論が示した子どもの姿は、このように自他の境界が揺らぎ、時に主客未分の状態で生きられる世界とつながる体験を必要としていることをあらわしていると言えよう。

2. 身体に応答する粘土のありよう

事例における粘土と身体の間を振り返ると、子どもは、あらかじめ先行する明確な目的や目指す形を抱いて粘土と関わっていたのではないことがわかる。バシュラルの、「われわれの想像力のなかには、理想的捏粉の物質的イメージ、つまり抵抗と柔軟さの完全な総合、受け入れる力と拒否する力のすばらしい均衡が存在している」²⁹⁾という論考^{注6)}に依拠すれば、子どもは粘土という物質の状態を身体で受けとめ、その均衡の中で相補的な関係にあったのだと考えられる。例えば水や砂に比べ、粘土は貼りつけられた指先でも流れ落ちることなくその形をとどめる強度を有する物質である。粘土に触れることで生じる身体感覚は、同時に粘土にもその形の変化として現れているのであり、子どもは自己の身体の外在化を体験していたとも言える。よって、人の身体が発する動きや力に応答して変化し、かつその痕跡をとどめるという粘土のもつ強度が、子どもの身体性をより発揮させたのだと考えられる。以上のように、概念化されていない粘土そのものとの出会いが子どもの身体の変容を誘い、身体に応答する粘土の「手ごたえ」³⁰⁾、すなわち粘土のもつ強度が、子どもの身体を造形表現へと結びつけていたのだと言える。ここに、粘土との関わりの中で、粘土を身体につけずにはいられない子どもの表現行為の内実の一端が見出せよう。

3. 造形表現における体験のありよう

冒頭でも指摘したように、先行研究では、有用な生産活動という枠組みから子どもの造形表現を捉え、制作能力と表現とを結びつけて論じてきたために、表現する主体である子どもの内的体験には焦点が当てられず、その内実ほとんど明らかにされてこなかった。そうした傾向では、何かをつくる、表現するための材料として、粘土の用途がいわば自明のこととして位置づけられていたと言える。

しかし、本論文が描出した具体的な子どもの姿は、粘土遊びにおける表現では、生産性や制作能力のみに還元できない事象が生起していたことを示している。そして、子どもは粘土と身体の直接的な関わりにおいて、原初的な世界つまり概念づけられる前の世界、あるいは概念から離れた後に現れる世界と接触し、時にその世界に溶解する体験をしていたのである。このような体験によって、矢野の言葉を借りれば、子どもは「自分をはるかに超えた生命と出会い、有用性の秩序を作る人間関係とは別のところで、自己自身を価値あるものと感じ」、「未来のためではなく、この現在に生きていることがどのようなことであるかを、深く感じる」ようになるのであり、こうした体験を母体として自己の尊厳が生まれていくのだと考えられる³¹⁾。つまり、粘土との関わりの中で身体の境界が開かれ、世界とつながる体験によって得られる身体感覚が、自分の身体との新たな出会いと自らの存在への肯定感を生み、自己の生成を支える基盤となっていくのだと言える。

以上のことから、造形制作能力や有用な生産活動のみを問い求める視点に依らない表現活動の重要性が見出されたのではないだろうか。そして、このような体験を保障し、可能にする環境として、保育における“表現”を捉えていくことの必要性が本論により示唆されたのではないだろうか。

本論文では、造形表現が子どもにとっていかなる体験であるのかを問い直そうという問題意識から、粘土遊びにおいて“粘土を身体につける”事象に迫り、造形表現における身体のありようの一端を描き出すことを試みた。造形表現が固有の身体と身体感覚に基づいているがゆえに、そこで生成される表現は多様である。本論はその一側面を検討したに過ぎない。また、論拠となる身体論も各種あろう。今後の課題として、身体論や身体感覚についての検討を重ねると共に、発達との関係の中で子どもの表現や身体性を明らかにしていく必要がある。さらに、子どもの表現を共感的に理解する他者の存在も視野に入れて考察を深める必要があるだろう。

注

注1 本論における筆者は、子どもが粘土と関わる行為全般を捉えようとする視点に立つため、「粘土遊び」と「粘土造形」とを区別せず、両方を含むものとして「粘土遊び」を用いる。ただし、引用する先行研究で「粘土造形」が用いられている場合は、その表記に倣うこととする。

注2 先行研究で目指されている“望ましい表現”“よい表現”とは、ローウェンフェルドのいう「触覚型」³²⁾の作品である。すなわち、立体的かつ量感豊かでダイナミックな表現に価値が置かれていると言える。

注3 現在保育現場で使用されている粘土の多くが「油粘土」であり、また、様々な種類の粘土が出てきたので、ここではそれらと区別するため「土粘土」と説明を加えた。「油粘土」とは異なる「土粘土」の主な特徴は、油粘土特有の（油が入っているために生じる）においやべたつきがないこと、その条件に加えて単価が安いために大量に用意できること、含ませる水分量と時間経過に応じて硬さが変化することが挙げられる。

注4 拙稿（2011）で明らかにされた粘土遊びにおける表現の6つの様相は次の通り。Ⅰ. 粘土の感触・身体を感じる、Ⅱ. 粘土でもの・場所をつくる、Ⅲ. 粘土を身体につける、Ⅳ. 粘土が遊ぶ場になる、Ⅴ. 粘土が居場所になる、Ⅵ. 粘土が他者とのあいだにある。

注5 本論文の研究倫理的な配慮は、日本保育学会倫理綱領に則っている。

注6 パシュラールは、地水火風という四大元素についての物質的想像力研究を締めくくる著書の中で、「捏粉」（すなわち「水と土との中間形態」）と「柔軟な物質」の持つイメージについて論じている³³⁾。

引用文献

- 1) 文部省（1979）幼稚園教育百年史. ひかりのくに株式会社
- 2) 山形寛（1967）日本美術教育史. 黎明書房
- 3) 南陽慶子（2011）子どもの“表現”のはじまり—粘土遊びにおける表現行為の内実を探る—. 修士論文. お茶の水女子大学. 東京
- 4) 栗原泰子（2003）幼稚園教育における「表現」教育の系譜(1)—6 領域時代における「表現」の捉えられ方—. 日本保育学会大会研究論文集. 56. 558-559
- 5) 米野苑子（2002）粘土・その多様性を生かした造形表現. 立正大学社会福祉研究所年報. 4. 97-106
- 6) 中川織江（2001）粘土造形の心理学的・行動学的研究—ヒト幼児およびチンパンジーの粘土遊び—. 風間書房
- 7) 前掲6)

- 8) 前掲6)
- 9) 新井秀一郎 (1970) 児童画と児童彫塑. 東京学芸大学紀要, 第5部門 第21集, 169-177
- 10) 新井秀一郎・益田勢津子・藤島清雄・高浦浩・伴勝雄 (1971) 児童画と児童彫塑(2): 児童彫塑の発達段階. 東京学芸大学紀要, 第5部門 第23集, 112-176
- 11) 神谷睦代 (2009) 幼児の粘土造形—基礎的な技能の習得及び題材(テーマ)についての実践と検証—. 美術教育学: 美術科教育学会誌, 30, 175-189
- 12) 塩見知利 (2006) 造形リテラシーとしての感覚遊びの重要性に関する研究ノート—幼児における造形リテラシーの意味と方法—. 平安女学院大学保育研究, 34, 42-48
- 13) 津守真 (1987) 子どもの世界をどう見るか—行為とその意味—. NHKブックス526, 放送出版協会
- 14) 岡本夏木 (2005) 幼児期—子どもは世界をどうつかむか—. 岩波書店, 126
- 15) 鷺田清一 (2006) 身体をめぐるレッスン1—夢みる身体—. 岩波書店, ix
- 16) 前嶋英輝 (2009) 粘土場の遊びと環境. 美術教育, 292, 76-84
- 17) 佐藤郁哉 (2006) フィールドワーク増訂版—書を持って街へ出よう—. 新曜社, 159
- 18) 鯨岡峻 (1997) 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房, 7
- 19) 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門—実践と質的研究のために—. 東京大学出版会, 15-16
- 20) 鯨岡峻 (1999) 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房, 98
- 21) メルロ＝ポンティ, M. (1967) 知覚の現象学1. (竹内芳郎・小木貞孝, 訳) みすず書房, 304
- 22) 同上, 242
- 23) 前掲3)
- 24) 前掲21), 188
- 25) 同上, 247-248
- 26) 同上, 249
- 27) 矢野智司 (2006) 意味が躍動する生とは何か—遊ぶ子どもの人間学—. 世織書房, 116
- 28) 市川浩 (1992) 精神としての身体. 講談社学術文庫, 183
- 29) バシュール, G. (1972) 大地と意志の夢想. (及川馥, 訳) 思潮社, 89 (傍点は原文ママ)
- 30) 同上, 21
- 31) 前掲27), 115
- 32) ローヴェンフェルド, V. (1995) 美術による人間形成. (竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄, 訳) 黎明書房, 327-334
- 33) 前掲29), 85-139